

馬韓伝「蘇塗」の習俗

——村の出入口にみる宗教的対象物——

鳥 越 憲 三 郎

一 韓族の歴史

朝鮮半島の中・南部へ亡命渡来した古代の韓族は、日本人と民族的に同じ「倭族」に属するものである。その彼らが倭族であることの証左となる習俗を紹介したいと思うが、まずその歴史から述べることにしたい。

その韓族の領域はほぼ北緯三八度線以南で、西に馬韓、東に辰韓、南に弁韓として分立し、馬韓は五十四国、辰韓と弁韓はともに十二国で構成されていた。ところが三韓に分立する以前のことについて、『後漢書』東夷伝の韓の条には、左のごとき注目すべき記事がみえる。

大なるは万余戸、小なるは数千家、各々山海の間に在り、地は合わせて方四千余里、東西は海を以て限りとなし、みな古の辰国なり。

馬韓は最大、共にその種を立てて辰王となし、月支国に都し、ことごと尽く三韓の地に王となる。その諸国王の先は、皆これ馬韓種の人なり。

さらに『三国志』魏志東夷伝の弁辰（弁韓）の条にも、弁辰が十二国で構成されていたことを述べた後に、同じく左のように記されている。

その十二国は辰王に属す。辰王には常に馬韓の人を用いて之を作り、世々相継ぐ。辰王は自ら立ちて王となることを得ず。

これらの記事から判断すると、三韓分立の前に「辰国」と称し、辰王が治めていたことがわかる。そして三韓分立後においても、辰韓・弁韓はもと馬韓から分かれたため、なお辰王に服属していた。その辰王は馬韓五十四国の一つである月支国を都とし、辰王には馬韓の人が選ばれることになっていたというのである。

ところがその辰王について、さらに興味ある記事が『後漢書』につづいてみえる。

初め、朝鮮王の準は衛満のために破られる所となり、すなわちその余衆数千人を將い走りて海に入り、馬韓を攻めて之を破り、自ら立ちて韓王となる。準の後は滅絶し、馬韓人がまた自ら立ちて辰王となる。

建武二十年、韓人の廉斯人の蘇馬謨らが楽浪に詣りて貢獻す。光武は蘇馬謨を封じて漢の廉斯邑君となし、楽浪郡に属さしめ、四時朝謁す。

靈帝の末、韓・濊みな盛んにして、郡県は制する能わず、百姓は苦く乱れ、流亡して韓に入る者多し。

右の記事について、歴史的事情を簡略に述べておきたい。

古朝鮮の領域の大半はもと遼河一帯の地であったが、四十二代の準王のとき燕のため遼河の地を失い、鴨緑江以南の朝鮮半島内に縮小された。後に準王は燕人である衛満に討たれ、古朝鮮は約九百年間で亡ぶ。それは紀元前二百年ころのことである。

そこで準は数千人を率いて海に逃げ、馬韓を攻めて韓王となった。しかしその跡は絶え、再び馬韓人が辰王となって復興した。したがって辰王の歴史は古く遡るのである。

朝鮮を滅ぼした衛満は平壤を都としたが、その孫の右渠のとき、すなわち元封三（前一〇八）年の夏、前漢の武帝の征討をうける。そして朝鮮は王の右渠を斬って降服し、わずか三代で終わる。武帝はその地に楽浪・

臨屯・玄菟・真番の四郡を設置し、漢の植民地としたが、紀元前八二年には四郡を合わせて楽浪郡と改称された。

それから時代を降り、後漢の光武帝の建武二〇（四四）年に、楽浪郡に近い廉斯（村名）の韓人、蘇馬謨という者が楽浪郡に貢献した。そこで光武帝はその地を楽浪郡に編入し、彼を漢の村長として認めたというのが、右の中段の記事である。

この光武帝の建武中元二（五七）年に、北九州の倭奴国が朝貢して金印を下賜されたが、さらに安帝の永初元（一〇七）年にも倭国王の師升が貢献している。右の記事も韓人で漢を慕って来る者のいることを記したものであろう。

しかしその後楽浪郡は縮小された。東は狼林山脈（単々大嶺）で、北は清水江（湏水）で限られた。その理由は、東方では濊貊族が勢力を盛り返し、また北では遼東半島の東方にいた高句麗が紀元前一世紀から強盛になって南進政策をとり、鴨緑江（馬訾川）を越えて南下し、領域は清水江にまで達したからである。

このように後漢が勢力を失墜したころの状況を記したのが、右の記事の後段である。靈帝の末とあるので一八〇年代とみられるが、韓族と濊族が強盛となり、楽浪の郡県の統制がとれず、百姓は苦しみ、韓に流出する者が多かったと述べている。

実は『後漢書』東夷伝の倭の条に、「桓靈の間、倭国大乱」とみえるが、二世紀後半から後漢の権威は下降して乱れる。そして二二〇年にはついに滅んで、蜀・魏・呉の三国時代を迎える。そうした中国の情勢は東アジア全体に波及し、わが国でも倭国大乱となつて、北九州勢力は滅び、大和の邪馬台国によって統一される。三韓に分立したのも、このころであつたとみてよいと思う。

しかし前述したごとく、三韓分立後においても、馬韓の辰王が三韓に君臨していた。ところが四世紀前半

に、扶余国を亡命した王族によって馬韓は討滅され、百済が建国される。これをもって辰王の制度は廢絶したものとみてよからう。

二 蘇塗とソッテ

支配者の交替はただ政治権力の移行にとどまらず、その民族の風俗慣行までも変様される。王権を保障してきた神話についてみても、更迭した百済の王権によって馬韓に伝承されていた神話は抹消され、今ではその内容を知ることができない。ところが幸いにも、馬韓の特殊な習俗としての「蘇塗」のことが、『後漢書』『三国志』『晋書』の馬韓伝にみえる。そこで左にそれを紹介しよう。

（後漢書・東夷伝・馬韓）

常に五月を以て田竟^{おほ}り、鬼神を祭るに昼夜酒会、群聚歌舞、舞うこと輒^{すなわ}ち数十人、相隨いて地を踏^ふみ節をなす。十月に農功畢^{おほ}り、また復^{また}かくの如し。

諸国邑、各一人を以て天神を祭ることを主^{つかさど}らしめ、号^なづけて天君と為す。又蘇塗を立て、大木を建て以て鈴鼓を懸^つけ、鬼神に事^{つか}う。

右の前段は『三国志』『晋書』とも内容的に同じで問題はないが、後段の表現には微妙な差があり、しかも蘇塗についての解説もみえるので、左にそれぞれを紹介したい。

（三国志・魏書・東夷伝・馬韓）

鬼神を信じ、国邑各一人を立てて祭りを主^{つかさど}らしめ、之を天君と名づく。又諸国には各別邑あり、之を名づけて蘇塗と為す。大木を立て、鈴鼓を懸^つけ、鬼神に事^{つか}う。諸亡逃れて其の中に至れば、皆これを還さず、好みて賊を作る。その蘇塗を立つるの義、浮屠^{ふと}に似るあり。

（晋書・四夷伝・馬韓）

国邑、各一人を立て、天神を祭ることを主らしめ、謂うに天君と為す。又別邑を置き、名づけて蘇塗すたといふい、大木を立て鈴鼓を懸く。その蘇塗の義は西域の浮屠に似るあり。

蘇塗について右の三書から推察してみたい。『後漢書』は「蘇塗を立て、大木を建て以て鈴鼓を懸く」とあって、造作物としての蘇塗が立てられ、その傍に鈴鼓をかける大木も立てられることがわかる。ところが『三国志』では「別邑あり、之を名づけて蘇塗と為す」と記し、また『晋書』も「別邑を置き、名づけて蘇塗といふう」とみえて、ともに特別な地域を設け、蘇塗はその地域の名称のように受けとれる。これをどう理解するかが問題である。

しかし『三国志』ではつづいて、「その蘇塗を立つるの義、浮屠に似るあり」と記し、『晋書』でも「その蘇塗の義は西域の浮屠に似るあり」とみえる。西域とは中国から西方地域をさした総称で、浮屠は sutpa、すなわち仏塔のことである。そこで、蘇塗は円いドーム形の仏塔に似た築造物であることが明らかで、つまり円錐状に石を積み上げた塔をさしたものと解される。

したがって前記の三書を総合して判断すると、築造物それ自体を蘇塗というとともに、蘇塗のある或る範圍を聖域と認め、その聖域をも蘇塗と呼んでいたことがわかる。『三国志』が蘇塗のある地域へ逃亡者が逃げこむと捕えることができず、そのため悪人をつくりやすいと記しているのもうなずけるのである。聖域にのがれると、何人であらうとも捕えられないというのは、世界にひろくみられる慣習である。

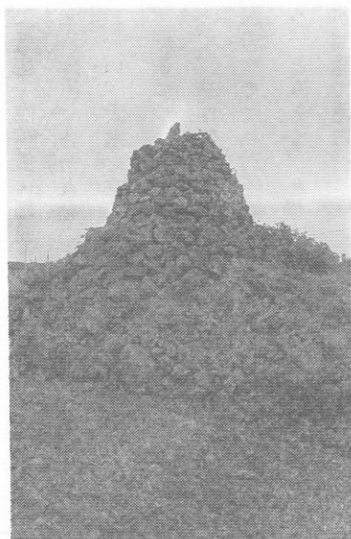
ところで、この蘇塗についての記事は前記の三書とも弁韓・辰韓の条には見えず、馬韓だけに限られている。それは三韓の中で馬韓が群を抜いて最大であり、また馬韓の辰王が三韓を統べていたため、『後漢書』は韓族の習俗として馬韓の条に記したのであらう。その後の『三国志』『晋書』は『後漢書』の記事を採用し、

補足説明をただ加えたものとみてよい。

そのように理解はしたが、撰修の時代からいうと、実は『三国志』の方が『後漢書』より古いのである。『三国志』は晋の陳寿が撰し、これに対し『後漢書』の志三十卷は晋の司馬彪によるが、東夷伝が載る列伝八十卷は宋の茫曄の撰といわれ、百年あまり後になる。しかし問題の蘇塗ひとつをみても、『後漢書』の方が後のものとはいえず、何らかの形で記録されて伝わっていたとみてよいと思う。

さて、その蘇塗に関する記事は、前記の三書以後の文献に見えない。百濟になってから、古い馬韓の習俗は消滅したのであろうか。ところが現在でもまだ息づいて残っていた。

初めてそれに気づいたのは濟州島であったが、自然の乱石を円錐状に積み上げたもので一般に塔(타)と呼ばれ、また村の入口に設けられて悪鬼や病魔の侵入を防ぐことから、防邪塔ともいわれるものであった。それはまさしく円形のドーム形をした仏塔に似ていて、直観的に『後漢書』などの「蘇塗」の記事を思い出したのである。



濟州島のタプ

北濟州郡に散在する陸稻を耕作する村へ、濟州市民俗自然史博物館の梁東鎮氏の案内で行く途中、濟州市郊外の梨湖一洞で車を停め、思いもよらぬものを見せてもらった。

十二号線道路から火山灰畑を横切って進むと、その畑の中に左右二基、乱石を円錐状に一〇メートルほど高く積み上げ、その頂上に鳥形の自然石をおくもので、それがタプと呼ばれるものであった。今は周囲が

畑になっているが、かつては村の入口で、悪霊や病魔の入るのを防ぐための宗教的な施設であると聞かされた。

わたしが非常に興味を示したので、彼は隣接する内都洞にもあるといって車を走らせた。村の入口の道端に一基だけが、しかも低く上部が削られて変形したタブが見つかった。だが幸いに、その頂には自然石の鳥の形象物が置かれていた。そこから少し進むと、人家の横に同様なタブがあり、この二基が一組であったのであらう。

タブの上におく鳥の形象物は、後でくわしく説明するように重要なものである。その鳥のことにあまりにも関心を示したためか、彼は十二号線道路から見えるタブに木製の鳥を置いたのがあったという。そこで引き返して涯月邑の方へ車を走らせた。しかしタブは壊されていたらしく、ついに見つけることができなかった。彼はかつて涯月邑の邑長をしていたので、そのころは木製の鳥をおくタブもあったのであらう。

ところが後日、済州大学の玄容駿教授から、木製の鳥の写真を撮り、その実物を大学の博物館に保存しているということを聞いた。タブの上に自然石の鳥ではなく、木製の鳥の形象物をおく村もあったのである。

そのほか済州道庁の社会局長である洪淳晩氏から、南済州郡大靜邑にもタブがあると聞き、案内してもらって訪れた。道の左右にかなりの間隔をおいて数基あったとのことであるが、畑の中に一基だけが残っていた。しかもそれは近年の生活改善運動で迷信とされてすべてが壊されたが、その直後に牛がつぎつぎと死んだので、一つだけを復活してつくったものであった。

古老の話では済州市内をはじめ、むかしは各地にタブがあったという。全島に分布していたためか、観光地として最近つくられた名所にはタブが模造されて築かれていた。涯月邑の競馬場の入口に二基のタブがあって、その頂には自然石の鳥がおかれていた。しかし済州市郊外の木石苑や、表善面表善里の済州民俗村にもタ

ブが模造されていたが、どうしたことか鳥の形象物はなく、頂にはただの石がおかれていた。

ところがタブの石造物が、朝鮮本土の錦江流域にも分布していることを知った。そうなると、タブは済州島の特殊な習俗ではなく、本土から入ったものだということになる。しかも錦江流域はむかしの百済の地で、済州島が耽羅国と呼ばれていた時期に百済の属国であったことを思うと、百済の習俗を入れたものと考えられる。そこで翌年、タブの源流を求めて錦江流域を訪れることにした。

錦江流域でも上流の忠清北道の報恩郡に特に多く分布していると聞いたので、大田市で一泊したのち川沿いに車を上流へと走らせた。その途中で沃川郡庁に立ち寄ったところ、郡内にもタブがあるという。そこで職員二名の案内でめぐることにした。

しかし安南面で二カ所、東二面で一カ所あるのを見つけただけである。それもタブはどれも一基だけであった。峠の村である池水里細橋洞では、峠の上にもう一基あったという。しかも現存のタブの頂の石はかつて盗まれ、新しいのを立てたものであった。生活改善運動で迷信の対象物とされ、多くのタブが破壊されたようである。



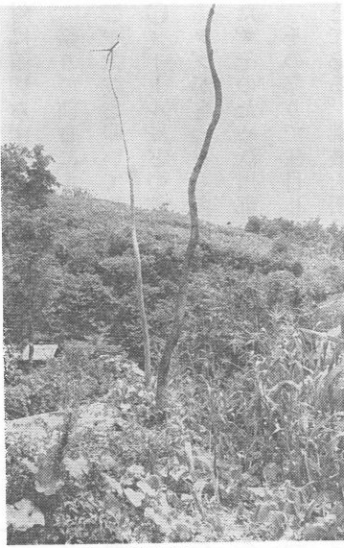
安南面池水里のタブ

錦江流域の踏査を試みたのは、もちろんタブの原形が見られると思ったからであるが、当然タブの頂には鳥の形象物があるものと期待していた。ところが円錐状に乱石を積み上げ、形状は済州島のものとまったく同じであったが、頂に鳥の形象物はなく立て石がおかれているものであった。

つぎに民俗資料として郡が指定している東二面青馬里馬時に行った。わずか三〇戸の小村で、錦江を小舟で渡る対岸にあったが、タブの一基が小学校の裏にあった。ここでもタブの頂にあるのは葛の巻いた立て石であった。

このほか近くの道端に、韓国北部にみられるチャンスン（상승）があった。これは北部地方の習俗を取り入れた後のものとみられる。チャンスンについての考証も重要なので、改めて後述したいと思う。

ところが注目すべきものを発見した。タブに近く二本の高い木が立てられ、一本は龍が巻きついたように彫



東二面青馬里のソッテ

ったもの、他は木の先端に木製の鳥をつけたものである。龍木は水の豊かさを願うもので、これもまた後世につくられたものとみてよい。というのは、鳥の形象物をつけた木を「ソッテ」と呼び、四年ごとに行われる祭りを「ソッテ祭り」といって、この木が中心とされているからである。

その「ソッテ」は前述の「蘇塗」と明らかに関係をもつ呼称である。しかし蘇塗は円錐状に乱石を積み上げたタブのことだとみられるのに、なぜ鳥の形象物をつけた木が蘇塗と似音で呼ばれているのであろうか。その究明に先立って、ソッテ祭りの概略を述べることにしたい。

祭りの十日前に、家族や家畜に死や出産の忌みのない人を数人、祭主は候補者として選ぶ。『後漢書』などにみえる「天君」というのが、その祭主にあたるものであろう。祭主はそれら候補者の中から、彫刻の上手な人を一人選定する。選ばれた人の家では禁縄キンチュル（注連縄）を門に掛けて家を清める。禁縄は左廻いのもの

で、曲尺一尺ほどの間隔に、松の小枝と四手の紙を交互に垂らしたものである。

彼は村びとと共に山へ行つて適当な数本の木を選び、まず斧を入れる。そのあと村びとたちによつて伐られ、一同は歌をうたいながら木を家に運ぶ。そして祭主がまず彫り初めをしたあと、彼は大將軍の二本の杵や龍木を刻んで彩色し、さらに鳥の形象物もつくる。その間の一週間ほどは外出できない。

そして祭主の夫婦は郡庁のある町の市場に行つて、祭りの供物にする果物などを買つてくる。このときは絶対に値切らず、一番よい品を求めることになっている。

祭りの前日にあたる陰暦正月十四日の晩は火祭りをする。翌十五日の朝、それぞれの宗教的対象物を立て、鉦や太鼓を叩いて祝う。今はしなくなったが、以前は十五日の朝、村の入口の道を挟んで、両側の櫟の木に三メートルほどの禁縄を張つたという。

タブがもつとも多くあるという報恩郡にそのあと足をのぼしたが、近年の生活改善運動で完全に消失していた。そのため沃川郡のタブがわずか残っていることになり、前述の東二面で祭りの内容を知ることができた。その祭りで注目したいのは、『後漢書』などが「大木を建て以て鈴鼓を懸け、鬼神に事^{つか}う」と記していることである。鈴鼓を掛ける木とあるが、それは木製の鳥を先端につけた木を指したものだともみると、古代には鈴を振り太鼓を叩いて歌舞したあと、その木に掛けていたことがわかり、現在まであまり変わらないで伝承されていたことになる。

しかも鳥を先端につけた木を「ソツテ」といい、祭りも「ソツテ祭り」と称しているのので、鳥の形象物が重視されていることになる。しかし宗教的対象物の中心となるものは、いうまでもなく古くは蘇塗と呼ばれ、今ではタブという円錐状の石積みでなければならぬ。両者の関係は一体どうなのであろうか。

木の先端につけられた木製の鳥は、天の神が降臨するときの乗り物である。これに對しタブの頂におく立て

石は、天降った神の依り代とみることができる。ところがタブは恒久的な石積みであるが、鳥のついた木は四年目ごとの祭りに作り直さねばならない。そのことから、村びとはいつしか鳥の形象物のある木の方を「ソツテ」と呼ぶようになったとみてよからう。

韓国本土で現在見ることのできるタブがあまりにも少ないので断言しかねるが、本来のタブの形態は乱石を円錐状に積み上げ、その頂に神の依り代としての立て石をおくものであったとみられる。それは『後漢書』などが記す「蘇塗」を伝承するものである。そして傍に天の神が天降るとき乗り物として用いる鳥の形象物を木の先端につけて立て、神が実際に降臨して村びとを守っていることを具体的に示そうとしたものだといえる。そうしたタブが濟州島にも習俗としてもたらされた。ところが濟州島では前述のように、直接タブの頂に自然石の鳥の形象物がおかれている。それは木の先端につける鳥の形式を省略して、両者を合体したものといえる。

その濟州島でも現在はタブが数基しか残っていない。しかし村々には「ソルデワツ」と呼ばれる地が伝えられている。「ワツ」とは地域の意で、今ではタブが失われてはいるが、かつてタブのあった聖域の称だけは残っているのである。

ところで、そのタブが馬韓人みずからの習俗であったとは思われない。実は中国の東北地方で「オボ」と称し、自然石を円錐状に積み上げた頂に、神の依り代となる楊などの聖木を立て、宗教的対象物にするのがみられる。馬韓を征服した百濟人は、東北平原にいた扶余族であった。彼らが百濟を建国し、その習俗をひろめたものと考えられる。

そして濟州島のタブの習俗は、錦江流域からもたらされたものとみてよいが、それは百濟との政治的關係が生じてからだといえる。濟州島は古く耽羅国と称されたが、『三国史記』百濟本紀によると、文周王二（四七

六）年に耽羅国は百済に入貢し、間もなく百済の属国となった。したがって済州島のタブの習俗は、それ以降のことであったとみてよからう。

しかし考えなければならないことは、オボに鳥の形象物がみられないことである。またオボは村の守護神をまつる聖林に属するものであるが、韓国にみるタブは聖林ではない。村の入口に立てて、悪鬼や病魔が村に侵入するのを防ぐもので、そうした習俗も彼らにはみられない。タブは源流を異にする二つの習俗が習合したものと見えるが、他の一つは倭族に属する馬韓人みずからが伝えるものであった。そのことについて、節を改めて述べることにしたい。

三 チャンスンの分析

かつての百済の北部地方にあたる現在の京畿道を中心にして、村の入口に乱石を低く積み、その上に天下大



京畿道のチャンスン

將軍・地下女將軍と墨書した二本一組の杙と、さらに木製の鳥の形象物を先端につけた木を立て、まわりに禁縄をめぐらしたのがみられる。この宗教的対象物も同じく悪鬼や病魔が村に侵入することを防ぎ、村びとの平安と豊饒を願うものである。しかし韓国の生活改善運動で迷信とされ、多くの村から消えつつある。

その土台となる石積みは低く積まれたものになっているが、円錐形に積まれたタブの名残り、つまり蘇塗を受けついでいるものとみてよからう。また木製の鳥

の形象物を木の先端につけたものは、ここでも「ソツテ」と呼ばれ、前述の忠清北道沃川郡東二面で紹介したものと同じ形式である。したがって蘇塗であるタブの上に、神の依り代となる鳥の形象物をつけた木を立てた形式だといえる。

ただ異なっているのは、その石積みの上に天下大將軍・地下女將軍と墨書した人面の二本の杙が、新たに加わって立てられていることである。それには大きな意味がある。

その天下大將軍・地下女將軍と書かれた人面の杙は、俗にチャンスン（장승）と呼ばれるが、どの韓国辞典にも「長」と示されて、完全な対訳がされていない。学者の間では長丞をはじめいろいろな宛字が用いられているが、正しくは「長椿」とすべきである。「シヨウ」を韓音では「スン」という。つまり「長い杙」の意である。中国では犠牲にした牛の角を棒につけて地にさしたものを牛角椿といい、人間の首の場合は人頭椿と呼んでいる。そうした呼称によるものとみてよい。

チャンスンは二本の自然木の丸太で、それぞれの上部には男女の人面が彫られている。ともに冠をつけ、見ひらいた大きな目、歯をむき出しにした口、どぎつい彩色は、村に侵入しようとする悪鬼どもを威嚇するかにみえる。その異様な面貌から、人びとの関心はこのチャンスンにそそがれ、今では天下大將軍・地下女將軍が宗教的対象物の中心をなすものと思われている。

この天下大將軍・地下女將軍という名称は新しそうにみえるが、必ずしもそうとはいえない。実は百済の滅亡（六六三年）に伴って、六六五年に近江国（滋賀県）神前郡に四百余人、六六九年にも蒲生郡に七百余人が渡来して住みついたが、その地域には「ダイジヨウゴ」と呼ぶ祭りが行われている。それは「大將軍」の訛ったもので、大將軍社という小祠もみられる。したがって彼らの渡来以前に、そうした形象物がすでにあったことの傍証になる。

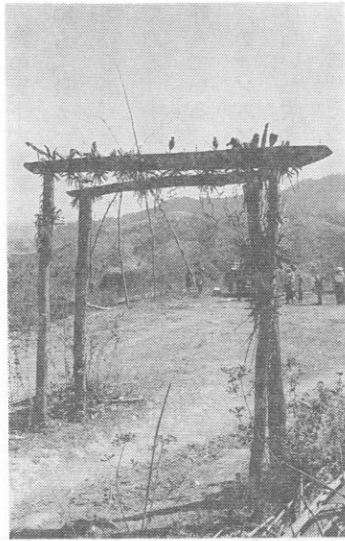
ところで、村の入口に設けるこの種の宗教的対象物の起源は古い。その源流とみられるものを、地理的には遠く離れているが、中国雲南省からタイ・ビルマ・ラオスにかけて住むアカ族、中国では哈尼族と呼ばれる倭族に属する少数民族の習俗を紹介し、解明の糸口にしたいと思う。彼らと同じ習俗が、倭族に属する馬韓人にも流れていたことを知られるであらう。

陸稻の播種のはじまる直前の四月吉日を選び、村びとの共同作業で村の入口と出口に木造の門を建てる。その門をロコーンという。近くの樹林から伐ってきた木材で門がつくられる。それは二本の柱の上に笠木をのせ

たもので、笠木には木製の鳥が数羽おかれるが、その数は決まっていない。そして竹のへぎでつくった輪をつらねた注連縄が掛けられ、また竹を鬼の目のように編んだダレが、笠木や柱にいくつも貼りつけられる。でき上がると村の入口と出口に建てる。

笠木の上におかれた木製の鳥は、天の神が降りて来るための乗り物といわれる。そして注連縄は村に侵入しようとする悪鬼や病魔を縛るためのもの、鬼の目は大きな目をした怪物がいることを示すおどしである。つまり門には村に近づく悪鬼どもを嚇すための呪具がつけられ、また天の神が鳥に乗って降りて来て見守っていることを示すものである。

さらに興味深いものが門柱の根元におかれる。ヤダ・ミダと呼ばれる男女の祖先像で、自然木の股木を利用してつくられ、股木のところにはそれぞれの性器が彫られている。最近では自然木から発展して、性器をあらわに示した男女の木製の人形をおく村も見かけられる。



村の出入口の門（アカ族）



村の門の祖先像（アカ族）

その門がつくられる間、作業に加わらない老幼者や女性、さらに妊婦をもつ男性も産を忌みて、村の外に出ている。門が完成して祭儀がすむと、村びとは入口の門から村に入る。門を通過することで心身に憑いていた悪鬼や病魔が除かれ、その清浄な心身で新しい農作業の時期を迎え、その年の豊饒と平安を願おうとしたのである。

右のアカ族にみる村の門の習俗がもっとも原初的なものとみられるが、それがいろいろな変形しながら、倭族に属する各民族に伝承されている。

村の出入口に木造りの門を建てるのは、中国雲南省の西双版纳傣族自治州のタイ族の村でいくつも見つけた。アカ族は門にだけ注連縄を張るが、タイ族では門から集落全体を囲んで注連縄が張られている。

そして木造りの門には刀などの武器が彫刻されていたが、アカ族でも門の外に弓矢などの木製の武器を何本も地上に突き立てている。神や祖先が悪鬼どもに対して用いる武器である。

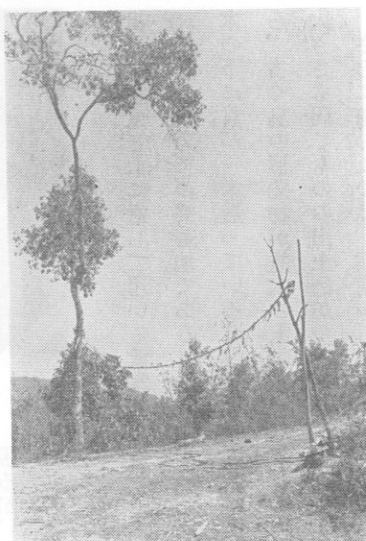
倭族の東方での終着地である日本にも、木造りの門が神社の「鳥居」として伝わっている。その鳥居には笠木の下に貫が一本通っているが、それは恒久的建築物とするための後世の補助材である。鳥居という呼称から、古く鳥の形象物が笠木の上にあったことを暗示している。しかも近年の弥生遺跡から、アカ族の鳥と形も大きさも同じものの出土例が多い。

さらに驚いたのは、雲南からビルマ・タイに分布するラフ族に、木造りの門を略して、村の入口の道を挟ん

で両側の木に注連縄を掛け渡していたことである。しかもその注連縄には、いくつもの鬼の目がついていた。ところが遠く離れた日本でも、ことに奈良・滋賀・三重の各県に多くみられるが、年頭の正月十一日に、村の出入口の道を挟んで両側の大木から注連縄が張られる。そして多くの場合、それに鬼の目がつけられていて、さきのラフ族のものと同じである。韓国でも正月十五日に、村の入口に同様に注連縄が張られる。

注連縄は村に侵入しようとする悪鬼や病魔を縛る呪具であるが、漢字の注連縄も正しくは「締め縄」という原義を保持している。それは中国の『荆楚歳時記』にみえる「絞索」（絞め縄）や、韓国の「禁縄」と共通した内容を伝えるものである。なお高句麗であった北朝鮮には注連縄がない。

村の出入口の門につける注連縄は、つぎに各家の門戸にも掛けられるようになる。倭族に属する中国や東南アジアの各少数民族でも、母屋の出入口に鬼の目をつけた注連縄が張られている。日本でも正月に飾られるが、伊勢・志摩地方では注連縄の中央に吊った木札の裏に鬼の目が書かれている。韓国では出産後に門戸に張



村の門の注連縄と鬼の目（ラフ族）



村の門の注連縄と鬼の目（奈良県）

る。

その習俗は日本にまで及び、ことに近畿地方を中心にしていくつも見る事ができる。韓国でも釜山市で、屋根に陶製の鳥をおいているのを三例見た。天の神がその家に降りて来て、家族を守護していることを示すものである。

さらに、アカ族で村の門の柱の根元におく祖先像の信仰も、倭族の移動に伴ってひろまっていた。それは天から降臨した神々や呪具による悪鬼や病魔の駆逐だけでは足りず、祖先霊も加わってもらいたいという願望



門戸に張る注連縄（少数民族）



門戸に張る注連縄の鬼の目（志摩）

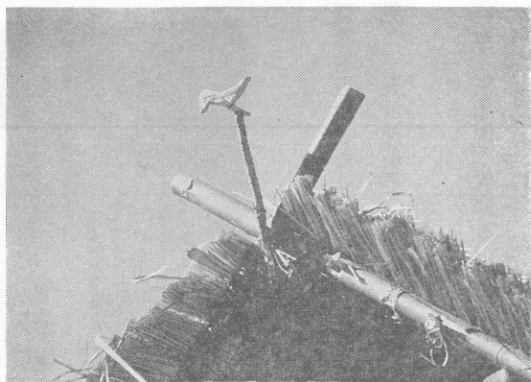
るが、特に男児には炭やトウガラシをつける。それは鬼の目に類するものである。

さて、つぎに鳥であるが、天の神の乗り物としての鳥の信仰はひろくみられる。古くは紀元前、雲南省で栄えた滇国の王墓から出土した青銅の建物の屋根に鳥がおかれている。また千年前の滄源崖画にも屋根に鳥を描いたのがみられ、その後裔である現在の佤族や布朗族でも、屋根に鳥の形象物を飾ってい

ところが長野県から関東地方にかけては、小正月の火祭りや二月のコト八日と習合して、木または藁で作った男女の人形を祀って焼くところもある。例えば群馬県吾妻郡嬬恋村の説話によると、「むかし村中にはやり病いがあって何人も死んだ。それは厄病神が誰を病ませるかという帳面をつくって道陸神に預け、その帳面の通りに誰それを病ませろといったからである。ところが道陸神は正月十四日にその帳面を焼き、そのお陰ではやり病いがおさまった。そのお礼として毎年正月十四日にドンドン焼きを始めた」（信濃三一八）というものである。



釜山の屋根の鳥



屋根の鳥（布朗族）

からのものである。
日本では古く塞ノ神として、多くは自然石を村の入口においた。それが後に中国の旅路を守護する道祖神と習合して、男女を示す道祖神の石像が村の入口のほか、峠や橋のたもとにも安置されるようになった。一部の地域では道陸神とも呼ばれるが、ことに男女抱擁の姿で石像になっているものでは、長野県の安曇郡や筑摩郡に集中的にみられる。

このように道陸神は病魔を防いでくれる男女一対の神とみられている。ところが男女一対であることから、性的信仰の対象ともされ、縁結びの神として年頃の男女が詣る習俗ともなった。また農耕神としてもみられ、木でつくった男女一対を杵の中でまつり、作神として米や餅を供えるところもある。性信仰と農作物の豊饒とが結ばれた習俗としては、村の出入口に張った一方の注連縄に男性、他方に女性の性器を模した藁の形象物を吊り下げたのがひろくみられる。

村の入口におく祖先像が、韓国ではチャンスンと呼ばれる天下大將軍・地下女將軍の一対の男女像にあたる。現在のチャンスンは異様な面貌をしているが、それは悪鬼や病魔を侵入させない願いのためからで、古くはもっと素朴なものであったであろう。

以上は村の出入口におく宗教的対象物について概説したものである。韓国では木造りの門はみられないが、自然石を積んだ上に立てる木の先端の鳥は、アカ族の門の笠木におく鳥の形象物と同じく、天の神々が降臨するのに用いる神の乗り物である。また天下大將軍・地下女將軍の一対の男女像は、同じく門柱の根元におく祖先像で、神とともに村の入口で村びとを守護していることを示すものである。そして呪具としての注連縄が、そのまわりに張られている。これらは倭族に共通してみられる習俗である。

しかし京畿道を中心にみられる自然石を積んだ形式は、既述したように倭族の習俗ではない。馬韓が減じ、百済の建国以後に影響をうけた中国東北地方のオボの系統をひくものである。すなわち馬韓伝にみる円錐状の「蘇塗」、現在の「塔」^タの変形であるとみるべきであろう。